

## 滋賀県・草津市の街を流れる公園づくり

～旧草津川を琵琶湖と結ぶ緑軸に～

日本不動産研究所 大津支所  
不動産鑑定士 目片 匡

### 1. 天井川の歴史

JR 草津駅付近から琵琶湖方向に緑の帯が横たわっている（写真参照）。天井川として名高い旧草津川で、幅は広いところで110m、その長さは7kmに及んでいる。旧草津川の天井川化が顕著となったのは江戸時代中頃からとされている。もともと流路が短いため、雨等によって大量の土砂が流れ込むと急激な河床の上昇をもたらし、少量の降雨でも流域に洪水の被害をもたらしがちであった。そこで、河床に堆積した土砂を掘り下げ、これを川の両岸に積み重ねた結果、堤はどんどん高くなり、高いところでは9mの高さに達している。川向こうの街との往来のため明治19年(1886年)に隧道(草津川マンボ)が建設され、その後、JR 東海道本線や国道1号もこの「川」の下をくぐっている。「川」の下を人と電車や車が行き来する様はまさに天井川そのものである。



『緑の軸』として整備される旧草津川」草津市提供

昭和期以降も大雨や台風により幾度となく洪水被害が発生したことから、昭和46(’71)年に琵琶湖総合開発計画の中小河川改修事業に採択されたことで、平地河川化計画が始まり、平成14(’02)年に草津川放水路(新草津川)に通水が開始されて旧草津川は廃川となった。

## 2. 草津川跡地利用基本計画

廃川となった草津川跡地は、草津市の市街地の中心部から田園部を経て琵琶湖に至る広大な空間で、種々の都市施設をつなぎ、地域環境の骨格を築き上げるだけの立地条件を有していることから、廃川と前後して跡地利用計画の取り組みが進められた。多くの学識経験者や地域住民、関連する行政組織を巻き込んだ種々の協議会等が組織され、検討されてきた。その成果は、平成23(’11)年に策定された「草津川跡地利用基本構想」にまとめられ、草津川跡地を「琵琶湖と市街地を結ぶ緑軸」として位置づけることが示された。更に、これを実現するためのより具体的な整備内容が検討され、平成24(’12)年の「草津川跡地利用基本計画」にまとめられた。

「どこにもない 魅力まちづくりの舞台開き」、「人と自然、人と人がつながるガーデンミュージアムをめざして」と副題がつけられたこの計画は、単なる公園づくりに終わらせない仕組みが随所に盛り込まれている。

そのひとつは、草津川跡地はその成り立ちから「郷土の歴史的資源」と位置づけられているが、これは市民へのアンケートやその後のフォーラム等を通じて共通認識とされてきたことで、街を見下ろし、ともすれば交通や日照・通風の妨げとなりかねない巨大な堤防を、便利さと折り合いを付けながらその姿を残していくことを市民が選択したことに他ならない。旧草津川が、多くの市民にとって暮らしに根付いた原風景であり、子や孫に語り伝えていく郷土の歴史と考えたからに違いない。

二つ目は、草津川跡地が、文化・コミュニティ活動が活性化される市民によるまちづくりの実践の場として位置づけられていることである。草津川跡地は、廃川以降今日に至るまでの期間、構想・計画が練られる一方で、地域住民の活動の場として暫定的な利用が図られてきた。何しろ7km(基本計画の範囲は、滋賀県が今後も管理する琵琶湖に近い1.3kmの区間を除く5.7kmの区間)の間には、いくつもの町があり、草津川跡地も河床がグラウンドとして整地されているエリアから、市民農園となっているエリア、草木が生い茂るエリアまでその状態は様々で、それぞれの地域住民はランドゴルフから冒険活動まで草津川跡地の様相に合わせた関わり方をしている。こうした活動の歴史は、今後の草津川跡地と市民の関わりを考える場である市民ワークショップ(平成24(’12)年12月～平成25(’13)年6月)でより具体的で多様なアイデアにつながり、またこれを実現するためには市民の役割が必要であることを気づかせている。暫定利用・計画づくりの段階からコミュニティ醸成の種を蒔き、低コストで質の高い空間の維持・管理の実現に向けて、地域マネジメントの担い手を育成していく取り組みがなされていることの意義は大きい。

三つ目は、空間を埋めるガーデンデザインの質の高さがあげられる。その全貌はまだ明らかではないが、草津川跡地は、中心市街地に近いエリアではより都市的で洗練されたガーデンとなり、周辺に田園風景が広がるエリアでは都市と農村の交流空間・農体験の場としてデザインされている。市街地より小高く位置し、起伏に富み、市街地と琵琶湖をつなぎ周囲の景色が種々移り変わる緑の空間は、ガーデンデザインのキーワードである「まちに掛かるみどり」と表現するにふさわしい。

### 3. ガーデンミュージアム

ガーデンデザインを中心とした「景観デザイン」、コミュニティの醸成を図る「コミュニティデザイン」に加え、未来を見据えた都市の安全性に寄与する「防災・都市環境デザイン」の3つの要素を組み合わせ、統一感と整合性を図ることで単なる公園づくりに終わらせない「トータルデザイン」の考え方に基づいた空間づくりとなっている。草津川跡地利用基本計画では、「ガーデン」に「多くの人に関わり、自然と人が時と共に生き、成長する空間」という意味を持たせており、このような活動を通じて創出される、生き生きとした風景を「ガーデンミュージアム」と説明している。これから長い時間をかけて創り上げられるであろう「ガーデンミュージアム」は、その時代に合わせて姿を変え、終わることのない人々の活動の場となるはずであり、まさに今「どこにもない 魅力まちづくりの舞台」が開幕しようとしている。